

“運動・スポーツで子どもたちを豊かに育み、そして輝かせる”

プロジェクトK

運動だ～いすき



【記事に関する問合せ先】

スポーツ推進課 プロジェクトK・
スポーツ推進係
☎ 57 - 4850

児童保育所でプロジェクトK開始！

近年、子どもの体力向上や高齢者の介護予防、地域の活性化のため、スポーツの役割が重要視されています。

市では、平成26年3月にスポーツ推進計画を策定し、市民が身近にスポーツができる環境を作り、自主的かつ主体的にスポーツ活動が取り組めるよう、さまざまな施策によりスポーツによる地域活性化を目指しています。

このような中、嘉麻市には市のスポーツ施策の推進役として18人のスポーツ推進委員が活躍しています。今年度から新たに市内各小学校の児童保育所で、土曜日に限定した出前講座を始めました。出前講座の内容は、徳島大学大学院の荒木秀夫教授が提唱する「オーディネーショントレーニング」や子ども達の相互協力が必要な遊びを中心に90分間の運動教室を行っています。

5月23日には、稲築東児童保育所において、荒木教授を講師に迎えて研修会が開催されました。研修会にはスポーツ推進委員や児童保育所の職員など約20人が参加しました。

次に、出前講座を導入したスポーツ推進委員の声を紹介します。

小屋野委員の声



私たちスポーツ推進委員は、予てからの課題である「児童の体力低下」はもとより、親子のふれあいにも着目して「運動能力アップ親子塾」と銘打った事業を展開してきました。

それなりの成果は出たものの、参加者しか指導を受けることができず、目を見張るような成果までには至っていないかったように思います。それがプロジェクトK事業の全市への導入によって、就学前の児童の様子が明らかに変わったそうです。

プロジェクトK事業は昼間に行われているため、私たちはあまり関わることはありませんでした。しかし、本年度から「児童保育所出前講座」が加わり、4月より「オーディネーショントレーニング」を児童と一緒に楽しみなで行っています。

「以前からコーデイネーションの指導を受けた児童と受けていない児童の動きの違いが歴然」「初めて指導を受ける子も同じ動作を2、3度繰り返すと見違える動きになる」「動作や思考はさまざまで、同じ運動をさせても個性がある」「低学年は特に、自分のことで手一杯で集団的意識が少ない（チーム意識が課題）」など、指導を行うたびに色々なことが見えてきて、指導の難しさより楽しさの方が増してきているように思います。

指導はまだまだ未熟ですが、『型にはめないよう、個性を活かしつつ指導をする』これを私なりの課題にしています。

私たちが今年スタートしたばかりでまだまだ学ぶことばかりだと思えます。『嘉麻の子どもはすごいぞ!』と言われるような子ども育成の一助にこれからも努力していきます。

萩尾委員の声

本年度から市内の学童保育所へ出前講座に行かせていただいています。子どもたちに、嘉麻市モデルのコーデイネーショントレーニングを中心にした運動に親しむ機会をつくるために本講座を行っています。



コーデイネーショントレーニングと遊びやニュースポーツを組み合わせて90分間のプログラムを考えています。子どもたちの「動きを真似しよう」と取り組む姿、「トレーニングや遊びに夢中になっている姿」、「仲間とコミュニケーションをとりながら動く姿」などが見られ、私は子どもたちから元気をたくさんいただいています。

また、子どもたちから「これしたことがある!」といった声が聞かれ、保育所や小学校において嘉麻市モデルのコーデイネーショントレーニングが浸透してきていることを感じていきます。

スポーツ推進委員では、これまで、市民の皆さんを対象にした「スポーツフェスティバル」や幼児を対象にした「運動能力アップ親子塾」などを行ってきました。

今後も市民の皆さんが生涯を通じて運動に親しむことができるよう、嘉麻市モデルのコーデイネーショントレーニングを中心とした運動の機会を提供させていただきたいと思っています。

プロ選手の技術を伝授! 第3回 嘉麻市バスケットボール教室開催!

6月7日、嘉穂総合体育館

において、ナショナル・バスケットボールリーグ(NBL) 2014-15シーズンで優勝したアイシンシーホース三河所属の橋本竜馬選手、金丸晃輔選手と和歌山トライアンズ所属の堤啓士朗選手を講師に迎え、「第3回嘉麻市バスケットボール教室」を開催しました。

教室は橋本選手の父和朗さん(大隈城山校教諭)がプロジェクトKの取り組みに賛同され、2年前から毎年開催しています。教室には、飯塚市出身の橋本選手と同じ福大大濠高

校出身の金丸選手と堤選手も参加し、準備運動のコーデイネーショントレーニングの後、午前中は小学生以下約30人の初心者教室、午後からは市内の中学校バスケット部員と高校バスケット部員約100人に対してプロの技術を伝授してもらいました。

特に、中高生は選手と実際に試合も行なうなかで、百発百中のスリーポイントシュートや華麗なドリブルなど、日本代表クラスのハイレベルなプレーを肌で感じていました。

嘉麻市バスケットボール教室開催に寄せて ～嘉穂総合高校嘉麻市立大隈城山校 教諭 橋本和朗～

嘉麻市バスケットボール教室が、3年目になりました。中には3年連続で受講している参加者もあり、小学校から中学校、中学校から高校へとカテゴリーアップしています。

講師である橋本竜馬選手は当初から指導に携わり、本年度の教室終了直後に東京オリンピックを目指した日本代表候補選手に選出されました。日本の未来を背負う金丸晃輔選手、堤啓士朗選手と



共にこれからは嘉麻市の健康増進と未来の育成にご協力できればと熱望しています。

◀ 写真左から橋本選手、堤選手、金丸選手

定位反応から

定位能力へ

文責・荒木 秀夫

運動がつくる視覚イメージというのが前回のテーマでした。その視覚イメージは運動感覚とのつながりが非常に重要であることを強調したわけですが、もう一度、定位反応の原点に戻って考えてみることにしましょう。

復習になりますが、以前に定位反応は新しい刺激を受けるとその刺激がどのような意味を持つのかを判断するために起きると説明しました。脳だけでなく、身体においてもいろいろな反応がみられるわけですが、「視野の確保のための運動」が、やがて目の前の物をいじるといった経験にも反映されることとなります。これは子どもの成長においては、大変重要な過程です。

しかし、その目の前からさらに広がっていくことにも注目しなければなりません。

3歳ぐらいの子どもの電車で初めて乗ったとすると、その子どもは電車全体の構造を認知することはないように思われます。目で見える電車のドア、車内の窓ガラス、手すり、つり革などは、多少なりとも記憶するでしょうが、子どもにとっては、大きな車体の構造をつかむことは非常に難しいはずで

ところが、電車に乗った子どもは、お菓子の空き箱（直方体）を見て、電車遊びを始めることがよくあります。つまり全体の構造をイメージしているのです。

大人にとって身近なこととして、地図の見方などにも共通しています。旅行などで、初めての土地でも自分の位置や方向を理解するのが得意な人もいれば、苦手な人（俗に、地理音痴とかいわれますが…）もいます。

この能力の差は、定位反応の問題から考えていくと、定位反応による分析結果が脳の中で集められ、わずかな情報でも大きな全体を推論する能力へとつながっていくことと関係しています。

これが、コオーティネーション能力における定位能力の重要な課題となります。



乳児シリーズ vol.4

赤ちゃんのコミュニケーションの始まり

赤ちゃんにとって、人の表情を見ることの重要性の話の続きです。顔を見て、その人の声を聴くことは赤ちゃんの認知能力を得る大切な経験であることは理解して頂けたと思います。しかし、表情を見るというのは意外にも物の認知、例えば、目の前にあるものがどのような存在なのか、自分にとって大切なのか危険なのかといったことをつかむ上でも重要な意義があります。大人が赤ちゃんの目の前で何かを見せて、“あやす”とします。その場合、赤ちゃんは、じっとそれを見つめますが、時々、大人の顔に目をやることもあり、物を左右に動かすと、特にはっきり見られます。いったい何を意味しているのでしょうか。

実は、赤ちゃんがその物体がどういう物なのかを人の顔を基準にして理解しようとしていることの表れとなります。そして、その理解の中で物を持っている人の“意図”も理解しようとするのが含まれています。前回、取り上げた“顔”と“声”のことから、今度は“物”が入ってきましたが、結局、相手が大人であろうと子どもであろうと、他人との交

わりの中で、相手の意図を感じる手始めとなるわけです。

このように、物の性質、特徴、持っている人の意図などを理解していくわけですが、一方で、例えば一つのスプーンを見せた場合、その赤ちゃんがスプーンで遊んだ経験があれば、それなりにスプーンの性質、特徴をつかんでいます。そのスプーンを大人が赤ちゃんの目の前で振ってみせた時に、スプーンそのものの性質を理解する以上に、持っている人の“意図”を読み取ろうとします。

赤ちゃんのコミュニケーション能力の発達は、おもちゃとか、何かの道具を使って遊ぶ中でも促されるということ意識しながら、改めて赤ちゃんと遊んでみてはどうでしょうか。



家庭でできるコーディネーショントレーニング ～乳幼児編（その2）～

コーディネーショントレーニングは赤ちゃんの脳の発達を促し、脳の発達には心の発達や身体の発達に非常に関連しています。運動というと走ったり、跳んだり、ボールを投げたりすることをイメージしますが、生まれたばかりの赤ちゃんでも運動は始まっています。赤ちゃんの運動にとって一番大切なことは感覚刺激をどのように与えるかということです。

平成26年11月号で紹介した家庭でできるコーディネーショントレーニングの乳幼児編“たかいたかい”に引き続き、今回は“ゆらし”を紹介します。

ゆらし

赤ちゃんは寝た状態で手足をバタバタと動かしますが、これは、胴体に振動を与えて一生懸命バランスの刺激を得ようとしています。そのため身体をゆっくり揺らされるととても喜びます。

【パターン1】

まず、上下の動きです。赤ちゃんと顔を見合わせて頭が上になるように抱っこします。次に赤ちゃんの身体が水平になるまでゆっくりと傾けてあげましょう。



【パターン2】

次は回転の動き。ここでも赤ちゃんと顔を見合わせながらゆっくりと回転します。パターン1の上下の動きも合わせながらゆっくりと回転しましょう。



視線を合わせて、話しかけながらパターン1と2の“ゆらし”を行うと、赤ちゃんがバランスをとるために必要な大変重要な刺激が養われます。